

9. 「生きることを支えたもの」

退所して「社会」で生きていくことの支えになったものは何と言っても、家族であったことが語られている。人間としてどう生きるか考え、人のために、家族のために生きることを選択した人。また、家族のためにこそ頑張ってきたということであるが、その気持ちは、単純な家族愛と言ったもの以上に、妻の自殺を乗り越え、「だました」「すまない」と思いながら、さらには自分の過去を隠すためにこそ愛情を注ぐと言った複雑なものである。

療友の存在、退所者同士の支えも重要であった。しかし、宗教はともかく文学、趣味等の回答は少なく、必死に自分と家族の生活のため仕事をしなければ生きていけないという厳しい退所生活の姿がうかがえる。

療養所の看護師や職員、友人が支えになったという聞き取りは、60年代末から70年代入所の人に多いのも象徴的である。

「病気は仕方ない。自分の責任ではない。自分の方から皆にとけこむように、自分から努力していくこと」(1934年 男性)という、病気の受容、周囲にとけ込む努力、「退所した頃は、税金を払うだけの給料はもらえなかった。自分の力で自分で食べて生きていくことが出来た。それまでは、園のやっかいになっていたが、自分の力で生きた」(1926年生 男性)という自負もまた、退所者への「社会」の壁の厚さ、厳しさを示すものといえよう。

(1) 脱走してでも、外(社会)で暮らしたかった

「脱走してでも、外(社会)で暮らしたかった(このままでは、いたくなかった)。外に出てからは生活(家族)があり、支えねばならなかった。」(1931年生 男性)

社会への強い渴望が見られる。

(2) 療養所に二度と戻りたくない

「もうああいう療養所には、もう二度と帰りたくないという気持ちね。それが強かったですね。できた家庭もペアになるしね。社会的地位もだめになるし、二度とむこうには帰りたくないということで、生活を、いつも食べて、栄養をつけて、キチッと生活していこうという気持ちが強いですね。それが支えになった。」(1937年生 男性)

(3) 人間としての生き方を考える

「人間として、どうあるべきか、いつも考えていた。本を読む事で、多くの事を学び、心の支えにした。宗教には頼らなかった。」(1922年生 男性)

「人間だ!という自分自身の主張だろうと思う。ハンセンになって捨てられるように療養所に入って、人間として扱われなかったのをみて、「オレも人間だ!」という叫び。

療養所も戦争もない平和な国にしたい。楽しく生きていける、偏見もなく差別もない社会が形成されるようにと思って生きてきた。自分が自殺をしそくなって病気に侵された体を肯定してからは、常にそれがあつた。人権無視の世の中を放置してはよくない。闘っていかなければという思い。」(1932年生 男性)

「まわりの方に恵まれたのだと思う。不自由だからこそ、まじめにしなければならないと思った。」(1942年生 男性)

「人のために役に立つこと。園の頃強く決意した(高校の作文)。子供ため、家族のためと頑張ること、生きること。」(1952年生 男性)

「不本意ながら隠れるような生活をしてきたからこそ、人に決められるのではなく、自分の考えで生きていこうと思えるようになった。宗教にも誘われて入った。療養所から出て自立することが人生の目的だったのに目的が達成されると人生の目的がなくなってしまって、どう生きていけばよいか、何を目的に生きていけばよいか悩んだからです。その時も自分の考えで続けなかった。」(1957年生 女性 1968年入所)

(4) 家族

「妻と家族。自分は家族に責任があるんだという気持ち。」(1937年生 男性)

「結婚し、妻に対する責任があつた。嫌われていた病気に負けていられないと思う気持ちが支えであつた。仕事に対する努力をしたこと、仲間に恵まれたこと。」(1941年生 男性)

「表向きに云えば妻が自殺をした(女房は夫がハンセン病であつた故に言葉では理解してくれていたが、一般の視線はきびしかった。それが自殺の原因だつたと思う。)その女房の死によって子供達(5人の)がいたから懸命に生きなければと。その苦しみが自分を支えてきたと思う。」(1939年生 男性)

「“家族”ですよ。支援者の方たちが100%の愛情をそそぐよりも家族の1の愛情をそそぐのにかなわないと思います。だから家族の皆さん手をさしのべるのは今ですよ、と話している。」(1941年生 女性)

「妻子(生活を支援しなくてはという責任感から入所中から働いて5万円の仕送りを続けた)特に子に対する思い、責任感。家族の絆が命綱。」(1944年生 男性)

「妻子があつたこと。病気になって死んだつもりとっていたこと。今、与えられた“恵”だから。」(1936年生 男性)

「妻の兄弟と付き合いができていた。」(1939年生 男性)

「母親の面倒をみること、子供を立派に成長させること。子供には自分ができなかったこと(人に役立つようなこと)をするように育てた。一人の人間としてがんばってほしい。『子供』が支えた。」(1946年生 男性)

「子供のためと思って生きてきた。子供が支えだった。子供は皆、私の病気は知っているが、娘の夫がひよんなことで知った時、「そんななんもううつらへんのだでしょ」と言ってくれた。」(1947年生 女性)

逆に、一人でいたことをあげた人もいたが、ハンセン病による隔離政策は、それだけの強さを強いたといえようか。

「中小企業ながら、その都度食べることに困らず仕事をやってこれたこと。父と生き別れて以来親類縁者との付き合いもなく、まったくひとり身でいた。それがよかったのではないかと思う。」(1940年生 男性)

(5) 仕事

「仕事が好きで、身体を動かすことが好きだったので、何か仕事があったことが支えだったと思う。退所直後は生きるために働き通し、その習慣から抜けられないといった状態か。」(1926年生 男性)

「社会復帰してからは子供(長男)の存在。それから、不自由者の付添い、看護の体験が長い人生での自分の支えだった。」(1937年生 男性)

「人並みに暮らしたい。人間として。努力して働いた。妻の励ましで仕事が続けられた事は感謝している。」(1939年生 男性)

しかし、仕事も、故郷を捨てる覚悟と目立ちすぎないようにやらざるを得なかった。

「ここが駄目なら東京があると思いつけてきた。無謀なことをやらず“そっと”やる。」(1931年生 男性)

(6) 療友・退所者の会、地域の友人

「藤楓センターの退所者の会、に来ることが一番楽しい。病気のことでも何でも話せる。カトリック教会に行くと少しはいやされている。」(1930年生 女性)

「周囲の人の恩情。気を使ってくれる人がいる。相互の関係を作ること。」(1930年生 男

性)

「草津にいる友人。“いざとなれば草津に行ける”」(1937年生 男性)

「今は、自分が地域で生活する中で、自分を知ってくれている人がたくさんいるのでそういう人たちからも支えられている。」(1938年生 男性)

(7) 宗教

「クリスチャンとしての生き方。罪だらけの救いがたい自分でも、すべて本音で生きるぶつかってきた、友人たちから見すてられなかった。きたえられて生きるうちに、多くの友人を、得たような気がする。それと妻、の存在。又 今は、自分が地域で生活する中で、自分を知ってくれている人がたくさんいるのでそういう人たちからも支えられている。」(1938年生 男性)

「宗教(聖公会)。教義が心の中にあるから。」(1918年生 男性)

「信仰(カトリック)を持っていたことで救われたと思う。療養所で出会った神父、シスター、職員、入所者達にも親切にしてもらった。その時々で出会ったいろんな人に支えられ、励まされ、いやされ、今の自分があると思う。倒れそうになると支えてくれる人がいつもあらわれた。」(1950年生 女性)

(8) 教育

いろいろな面で、教育が、大きな支えになっていることも重要である。

「夜間学校の6年間、あれが支えになったと思います。ああいう知識があって、実社会に出てきて、本当にあの当時、一人抜け、二人抜けで、最終的に、ぼくと、2人か3人しか残らなかったですよ、青年学校、夜間学校には。学問に興味のある人しか残っていないし、そういう形で実社会に出てきた時に、それが支えになった。」(1937年生 男性)

「子供の教育。自分の経験を考えれば、せめて子供達にはしっかりと教育を受けて欲しい。自分は子供の勉強のことはきつく当たった。子供は意味が分かっていないから『オヤジはきつかったなあ』と言うが。」(1935年生 男性)

「中卒だからといって負けるものかと思ってがんばってきた。」(1932年生 男性)

(9) 園の職員、看護師、友人

「療養所の職員(Dr.)から、「結婚しても良いんだよ」といわれた言葉も支えになった。絶望しなくて良いんだと思えた。」(1947年生 男性 1968年入所)

「看護婦の献身的なかかわり。」(1951年生 男性 1969年入所)

(10) 読書

「読書(ハンセン関係)について。深く読んで良かったか、読まない方が良かったか。シビアな歴史・中身について無知の方が良かったと今は思う。ある程度知識・経験を積んだ今の方がショックを受けないと実感。」(1951年生 男性 1969年入所)

(11) ただ、働くこと

「何もない。生きていくのは、最低限仕事して、趣味をもつこと。自分の過去をさとられないようかくし続けていくことであった。夢とか希望とかなかった。ただ働くことだけしかなかった。」(1950年生 男性)

(12) 病気に負けない、決別のために

「嫌われていた病気に負けていられないと思う気持ちが支えであった。仕事に対する努力をしたこと。仲間に恵まれたこと。」(1941年生 男性)

「入所した時の神経の痛みや、死ぬ程苦しかったこと、でもそこで生き残った、ということと比べたら、他のことはそれ程大変ではない。」(1955年生 男性 1965年入所)

「病気と決別している。病気であり続けるのなら多磨に入っている。病気のことだけは絶対に人に言いたくない。」(1959年生 男性 1968年入所)

(13) 感謝の気持ち

もちろん、感謝の気持ちが大事だという人もいる。しかし、「軽度だからいえる」ことであらうか。

「世の中には、もっとひどい病気の人もある。この病気にしても、自分は幸いにして軽い方であり、仕事も家庭も持つことができた。自分は恵まれているという感謝の気持ち。治療は、国が責任を持ってしてくれる。プロミンのおかげで、ガンにもなりにくいと聞いているし、うらむより、恵まれている部分に目をむけてきた(軽度だからいえるのだが...)。」(1947年生 男性 1968年入所)

「自分の力で生活する信念。弱気を人に見せない。人に対する感謝。」(1932年生 男性)

(14) 勝訴判決

「自治会での活動や裁判で勝訴判決を聞いたこと。“生きていて良かった”という言葉が自然に出てきた。」(1942年生 男性)